

産地の未来考えよう

かんきつ担い手確保でシンポ

【三重・伊勢】三重県御浜町で6月下旬、かんきつ栽培の担い手確保などを目的とした「三重南紀・農業後継者確保のためのキックオフ・シンポジウム」が、同町の中央公民館で開かれた。町内外から農業関係者ら約150人が参加し、産地の未来について考えた。

三重県御浜町

声かけなど、協力をお願いしたい」と呼びかけた。

同町では、情報発信や受け入れ態勢の強化を進めた結果、新規就農者が増えている。2024年度は45件の問い合わせがあった。23年度は研修生20人を受け入れ、今夏までに17人が経営を始める。同JAの子会社、オレン

シンポジウムは、御一つくる実行委員会が主浜町やJA伊勢、町内 催し、御浜町が共催。のかんきつ生産者らで 同町では、農家人口が

最盛期の7割以上減った約800人になり、うち70代以上が半数近くを占める。今後減少が危惧され、対応が急がれる状況だ。

シンポジウムでは、JA営農相橋（かんきつ）グループの鈴木賢職務代理が、地域のかんきつ産業の歴史や現状を説明した。座談会では、幅広い世代の生産者が参加し、意見を

交わした。

新規就農を目指す研修生は「人生をかけてミカン栽培に挑戦する人、農地継承を検討する人がいれば、農地バンクへの登録の検討や

農地確保の課題も顕在化している。かんきつ栽培は、木を一から育て、収入につながるまで数年がかかる。スムーズな農地継承ができれば、新規就農者の受け入れ強化につながる」と考えられている。

意見交換する中堅農家と新規就農を目指す研修生ら



意見交換する中堅農家と新規就農を目指す研修生ら